九州産業大学国際文化学部紀要　第9号 17—27（1997）

古井由吉の言語観

——『仮往生伝試文』を中心に

和田　勉

（一九九七年五月二一日受理）

序

古井は、浮動する口語文の脆弱さや限界を自覚していたゆえに、『山躁賦』（昭57）『眉雨』（昭61）『仮往生伝試文』（平1）のように文語文を意図的に採り入れる試みも行った。これらの中で『仮往生伝試文』が最も顕著に採り入れられており、こういう試みの集大成であると思われるので、この作品を中心に、古井に於ける言語観を明らかにしていきたい。『仮往生伝試文』は、古井の言語観を探る上で、恰好のテキストであると言える。小説の言語を問うことは、小説を成り立たせている言語の諸要素の構造を考察し、小説とは何かを問うことでもある。

古井は随想的に小説を書いてきたが、『仮往生伝試文』ではそれを更に一歩進めて、古典の往生譚への解釈と、自身の日記と、主に二通りの文体を意図的に用いることで小説を展開している。『仮往生伝試文』では、小説の内容そのものよりも、それがどのような文体や方法で描き出されているか、という問題の方が重要である。従来の『仮往生伝試文』論として、小林保治氏の「古井由吉『仮往生伝試文』——もう一つの『往生伝』——」（「解釈と鑑賞」平2・12）や、吉原浩人氏の「古井由吉——『仮往生伝試文』の『往生』をめぐって——」（「解釈と鑑賞」平4・10）等があるが、原典との比較や往生の解釈に重点が置かれており、作品の表現方法そのものを詳しく分析する必要があると思われる。

柳瀬尚紀氏との対談「ポエジーの『形』がない時代の言語表現」（「海燕」平7・3）の中で、古井は「通俗の衰弱に堕すまいとすれば、できるかぎり当初につかなくてはならない。そして当初につくというのは、極限をめぐるということと、ひとしくなるはずなんです」と述べている。この表現の「極

限」でものを書くという試みとして『仮往生伝試文』もあろう。ここまで至った要因に、古井の言語観が大きく関わっていると思われるので、それを分析してみたい。

なお、「言葉の呪術」（昭46）の中で、「言葉には表現の働きのほかに、聞き手読み手の人格を通り越して情念の深層に働きかける、呪術的とでもいうべき働きがある」と述べており、また「眉雨」の冒頭にも、「独り言がほのかにも韻文がかった日には、それこそ用心したほうがよい。降り降った世でも、あれは呪や縛やの方面を含むものらしい。相手は尋常の者と限らぬとか。そんな物にあずかる了見もない徒だろうと、仮りにも呪文めいたものを口に唱えれば、応答はなくても、身が身から離れる。人は言葉から漸次、狂うおそれはある」とある。言葉が呪術的な要素を孕むという、古井の言語観が明らかである。ただ、『仮往生伝試文』では、評釈や日記の体裁をとることで、呪術的で病的な言語を、表現の上からできるだけ排除しようとする意図が窺える。

一

『仮往生伝試文』を中心に古井の言語観について述べていく前に、十三章からなるこの作品の内容についてまず見ていきたい。

一章の「厠の静まり」では、増賀上人の往生話をはじめ、幾人もの僧の往生に至る経緯が綴られており、二章の「水漿の境」では、往生と食欲の関わり、及び死穢とその葬る土地の関わりに焦点が当てられており、三章の「命は惜しく妻も去り難し」では、盗人と一緒になるという、いわくつきの離れ難い縁の男女についての説話が綴られている。四章の「いかゞせむと鳥部野に」では、定家の『明月記』に描かれた俊成の臨終の経緯に関心が寄せられており、また一方で、この世の荒涼とした実相も描出されており、五章の「いま暫くは人間に」では、出家をするための食費を生涯ただ一度の賭博で稼いだ男の説話や、屋根の上から念仏しながら往来を見下ろしていた僧の説話や、定家の『明月記』に思いを巡らす日常が綴られている。六章の「諸行有穢の響きあり」では、都会の通夜に違和感を覚える日常や、鐘堂の下に住みついた法師姿の浮浪者の死穢にまつわる説話が綴られており、七章の「すゞろに笑壷に」では、五十なかばの姉の死や、その哀しみを秘めながら往来を眺めると、生者と死者の行きかうところとして見えてしまう日常が綴られている。[注1] 八章の「物に立たれて」では、人が立っていても、影のように存在感が薄いこともあり、逆に影であっても怯えにつながることもあるとい

うエピソードが綴られており、九章の「去年聞きし楽の音」では、一年の歳月をかけて往生を成就しようとした僧の説話や、身近な喧躁が切迫したものとして感じられる日常が綴られている。十章の「声まぎらはしほとゝぎす」では、同棲中の二人の荒涼とした日常に焦点が当てられており、十一章の「四方に雨を見るやうに」では、天候不順な折で、病人を見舞ったりして無常感を覚える日常が綴られている。十二章の「愁ひなきにひとしく」では、死生観についての感慨や、冥界にまつわる幻想が綴られ、十三章の「また明後日ばかりまゐるべきよし」では、死の恐怖に怯えた戦時中の回想や、病院に検診に訪れたりする日常が綴られている。各章に古文めいたタイトルを意図的に用いたりすることで、複雑な陰影に富んだ表現を具現化している。

結末の「また明後日ばかりまゐるべきよし」の章で戦争下を描いたことについて、古井は、「途中で身内に死なれなければもうちょっと違う展開をしていたと思う。僕が漠と目指していたのは、現代人がどんどん時間と空間を奪われる。感覚を奪われていく。やがては視覚、聴覚までおかしくなっていく。案外そこに往生の機縁はあるんじゃないか。――そういうことを目指していたんですけど。やはり身近でやられると、ちょっとそこまでのゆとりはなくて。（中略）僕としては故人への情にたしなめられて、そっちに行き、そっちのほうで終わったわけですけどね」[注2]と述べている。古井の言によると、『仮往生伝試文』では、現代人が、「時間と空間を奪われる。感覚を奪われていく」ところに「往生の機縁はある」という意図で執筆していたが、近親者の死を目のあたりにすることで、実感的に描かざるを得なかったというのである。確かに、「声まぎらはしほとゝぎす」の章では、「老いるということは、しだいに狂うことではないか。おもむろにやすらかに狂っていくのが本来、めでたい年の取り方ではないのか」と、老いることによる狂いが「往生の機縁」であると、随筆的に、批評的に述べている。だが、結末の「また明後日ばかりまゐるべきよし」の章では、一人称による私小説的な叙述の形式になっており、私小説的な文体をあえてとって「故人への情」を実感的に記している。結末の章では、過去の事実と回想と現在の想念の三つを錯綜させながら揺蕩って行くところに特性がある。

『仮往生伝試文』では、死屍累々のこの世に生息しているという無常感が、過去と現世をそのままつないでいる。往生伝を読む主人公「私」の日記[注3]は、日々が仮りに往生のようなものを体験しながら生きているという日常を綴っており、古典の往生伝の内容は、そのまま現世の人間にも通じるのである。

キイワードとして、「往生」の他に、「死穢」「身体」「幽霊」「無縁の者」等がある。人間とは、死屍累々の穢土で、老病死にまといつかれた影のような存在であり、往生すれば死穢として忌み嫌われ、無縁の者扱いされかねないものであるという視点で描出されている。

ところで、『仮往生伝試文』に、「摂津の国は小屋寺の話だそうだ。御堂があり、吹き抜けながら廊もめぐらし、幾棟かの僧房も構えて僧たちを住まわせていた。そこそこの大寺であったらしい。そこへ、ある日、物語であるから、人がやって来る。今の世の物語はいっそ、人は所詮やって来ないというほどの腹の据え方でかかったほうがいさぎよいと思われるが、それはともかく、年は八十ばかりの、汚げな法師がやって来る」（「諸行有穢の響きあり」）とあるように、古典では、人と人とのからみ合い、つまり物語性があるのに比べて、「今の世の物語」では、ドラマ性のない日常に置かれている。人間同士の葛藤を描くのではなくて、生死というはるかな視点から眺めれば、両者に違いはないという作者の意図が背景にある。今昔物語の往生譚や定家の日記を解読する一方で、現在の日記を記述するという、一見相いれないような内容・文体でありながら、時間を越えた視点から眺めると、違いはなくなってしまうのである。古典や現在の数多くの往生話が綴られており、ここには、一つの人生ではなく、多くの生死、つまり、時間や空間を越えて、一つの物語ではなく、複数の物語、複数の生死を同時的に、重層的にどう表現していくかという試みが為されていると言える。多くの生死が描かれているということでは、鷗外の『渋江抽斎』に通うような側面がある。

ところで、「じつに一年後には、ここに往来する人間たちのうち、かなりの数がこの世の者ではない。これを重ねて眺めれば、往来は今において幽明の境、生者と死者の行きかうところだ。是非もない」（「すゞろに笑壷に」）とか、「ふいに自分ひとりが異なった境に踏みこんで、往来の顔を唖然として見渡す。ああ、一年後にはこのうち何人もが、骨になっているのだろうな、とつぶやく。その返しで自分こそすっと、時差に迷い出た幽鬼のごとき心地に足もとからひきこまれる」（「いま暫くは人間に」）というところでは、「往来」を「生者と死者の行きかうところ」と捉えている。競馬場という荒涼たる場所を背景に採り入れたりすることで、「寒い最終レースまで帰らずにいる客のうち、何人に一人ぐらいが、来年の暮れ頃には、競馬場と言わず、この世にいないことだろう」（「また明後日ばかりまゐるべきよし」）というように、娑婆にいながら、時間を越えた世界が幻視されており、荒涼としたこの

世の実相が臨場的に描き出されている。また、「聖地だろうと俗界だろうと、この世はすべて穢土だ、肉体はいずれ蛆に食われるか腐れて土に帰るものだ」（「水漿の境」）とか、「新開の土地が土地になるには歳月がかかる。つまり、そこで人がどれだけ死んだかによる。道路も鉄道も、死者が積もれば、土地となる」（「物に立たれて」）とか、「死者の数があちこちでふえるにつれ、貧相だった植木はややうっそうとして、家々の灯もなにやら深いようになり、主人たちの背はかがまっていく。おいおい町は良くなっていく」（「声まぎらはしほとゝぎす」）というように、死屍累々の穢土に人は生きているということになる。内容にしろ、文体にしろ、死者と生者の交錯が伝わるように意図されている。

古井は、富岡幸一郎氏との対談の中で、「三年間連載して、その一回ごとに、その時に限って日記の文を重ねていけば、どのみち三年の経過が出るんじゃないかという、ずるい考えに傾いたんですよ。ある程度、時間の経過を出し得たかどうかというのは、これからまた確かめなきゃならない。私個人としては十分にあらわしているはずです。三年たっているんだから。三年たって、その間に肉親も亡くしていますから」と述べている。三年間の歳月を、小説の執筆時点で回顧するのではなく、雑誌に連載する三年間と同時進行する形で、三年間の歳月をそのまま小説の中に取り込もうという目論見である。作品は、後半になるに従って、古典の往生譚の世界から、作者の日常の実相に移行している。それでも、古典の世界と現在の世界との時間のスパンにどうしても目が行くし、三年間に死生観を含めた人生観に特に変化があるわけでもなく、季節の推移が如実に描写されているわけでもないので、現在そのものの歳月の経過は、ストレートには伝わって来ない。それでも不思議と、徐々に時間が経過して、一年、二年と年月が過ぎているということは感じとれる。それは、日記の記述や物語の解読という内容を虚心に読み続ける中で、客観的な時間の経過が五感に受け入れられ、内面に蓄積されるうちに読者の中に起る反応とでも言えよう。特に、四季折り折りの身心の状態が日記の中に記されており、このことが、歳月の経過や無常感を漠然と感じさせる上で効果的に働いている。

二

それでは、作品の内容と文体との関わりを見ていき、ひいては古井の言語観にまで言及したい。『小説家の帰還　古井由吉対談集』（平5、講談社）の中で、松浦寿輝氏は、『仮往生

伝試文』の文章の特質を、「テンス、それからもう一つは主語」にあると述べている。これに補足すれば、時制については、過去形を用いることで、沈着な表現となっており、更に文語体を意図的に積極的に用いることによって、それが強められている。過去形でしかも文語体で表わすことで、より重みのあるもの、より一層物質性を備えたものとして確固たる実在感を示し得ている。このことは、会話文の鉤括弧が極端に少ないこととも関わっている。会話体の台詞も、回想の中で採り入れられたりすることで、括弧なしで地の文とそのまま続く形で表わされている。また主語については、極力排除しており、日記の体裁をとったことと、古典の往生譚に解釈を加える形にしたことで、個人を越えた世界が志向されている。近代小説の特性である主格・主語をできるだけ省略することで自己離れでき、個人を越えた時間や空間そのものが描出されている。主語の省略によって、個人と時代の二つの側面を描き出すという試みであり、独特な技法であると言える。

古井は、『昭和文学全集第23巻』（昭62、小学館）の「解説に代えて」の中で、「時間や歳月をすくなくとも作中に蘇らせる、かりにも読者に感じさせる、これがつまるところ小説の役目だ、と私は思う者だ。また自分の作品にもそのことを願っている」と述べているが、このことは過去形の文体や主語の省略とも関わっていよう。また、『仮往生伝試文』の中にも、「古文というものはじつにまあ、歳月の経過をあっさりと、歳月そのもののように流して、しかもその間の事の厚みを想わせるものだと感嘆させられる」（「厠の静まり」）とあり、「歳月」にこだわり、それが「古文」と関係するという点に言及している。『仮往生伝試文』には、歳月を越えて、人間の営みの空しさを見つめる目があり、中世の時代と現代との間を自在に往還する試みが為されている。

古井は富岡氏との対談の中で、「もうちょっと、時間と空間が相即するような書き方はないものか。そう思ったとき、やはりエッセイか、日記に近いようなもので辛抱するに如くはない、となった」と述べている。小説的に語るのではなく、日記を綴るように言葉によってただ物として提示するだけであるが、その背後には、作者の「時間と空間が相即するような書き方」で記すという試みが反映している。現在では、小説を小説として成り立たせている時間と空間を同時に描写することが難しいという認識が古井にあったので、『仮往生伝試文』では、日記の体裁や随想的な文体を用いることで、時間と空間を同時的にそのまま表わすという目論見が為されている。そこには、物語になりにくい無事息災の日常やその中での想念が、虚心に書き綴られている。

また、古井は「この作品を書くうちに、今の自分の時間と、『明月記』のような時間とを、何とかして引き合わせてみたいと考えていた。すると、一番有効な方法は、ほんとうに人の日記をひねもす読んでいるような、ああいう再現ですよね。こんなことしていたら、小説としては落第でしょう。だけど、単なる引き写しではないというところに、僕自身の時間のアクセントがわずかながらあるわけです」と述べている。「僕自身の時間のアクセント」というのは、「人の日記をひねもす読んでいるような」、つまり、読者の頭に時間の停滞感を覚えさせるところが、かえってこの小説の面白味であるような仕掛けになっているところであろう。現代人は、近代が生み出したせちがらい時間の中を生きており、その意味では、近代の時間に呪縛されているとも言える。古井は、むしろ中世の『明月記』のような絞ることをしない時間に意味があるのではないか、それは、頭で考えるのではなく、身体で感覚するものだというように考えているのであろう。ここには、老病死に向かって時間が流れているという感覚がつかみとりにくい現代に対して、あえて古井が試みた実験的な方法が窺える。それは、更に言えば、「何事もなかった、というのも、考えてみれば、おかしな物言いだ」（「厠の静まり」）とか、「無事、ということさらに記すのを、不吉だとして嫌う人間もあるだろう」（「命は惜しく妻も去り難し」）という、無事息災の日常が、本人はそれとは自覚しないながら、日々往生に向かっている時間であることのやりきれなさであろう。食うことの無限の反復の中で、停滞感を覚えながら、一方でそれぞれの固有の「身体」に押し寄せる老いと死が示されている。

ところで、古井は富岡氏との対談の中で、「さっき、私小説が最大のフィクションだと言いましたが、日記はもっと切り詰められた、その意味で大きなフィクションになっている」と述べている。日記という体裁だと、フィクションの入って来る要素が少ないゆえに、一端フィクションが用いられれば、かえってフィクションの度合は大きいという、古井の逆説的な考えが示されている。私小説以上に作者に密着した「日記」という体裁をとることで、見かけの客観性は、とりあえず確保できる。それにより、小説の中から一見フィクションの要素を取り除いたようにして、時間のもつ重さそのものを浮かびあがらせようとしている。ただ、日記も「書く」ということでは虚構を含むといえ、言語という擬似的な事実を表現手段として用いる以上は、その疑似性を逆手にとる手管をもってするほかはない、ということを古井は承知していたのである。古井は「言葉の呪術」（昭46）の中でも、「私の言う虚構とはまず文体のことである。文体こそ虚構の最たるものだと

私は考える。もっと厳しく考えれば、書くことがすでに虚構とも言える」と述べており、言葉で伝えること自体が、既に虚構を孕むという言語観を持っていたことが窺える。このような言語に対する古井の醒めた認識が、結局は、随想的に表わす方がかえってフィクションが生きるので「真実」を造形することになる、という創作方法につながった。

そもそも日記には、記録的性質と自照性の二面があるが、『仮往生伝試文』に挿入された日記では、前者に重点が置かれ、後者については、往生に関連した死生観を展開するところで少し表白されているにすぎない。この作品の日記全体の特徴としては、告白を抑制しているので、古井自身の人間的実態を伝えるようにはなっておらず、それよりもむしろ、作家の目で見た現世の記録に重点が置かれている。その点では、鷗外や荷風の日記に近い。作家自体の人間的実態を伝えないということは、自己離れして、この時代そのものを客観的に写し出す方法であると言える。

ところで、古井は富岡氏との対談の中で、「大体、口語文というのは、私的なものと公的なものを一つに連ねて書くことができない。表現の呼吸があまりにも短い。一まとまりの長い構築を、一息に表わすことができない。（中略）口語の中におのずと積もった文語の力もあるだろう。長らく忘れているようでも、文語的発想を口語で表わす苦労が積もっているんじゃないか。横文字の発想もいろいろ積もって、随分熟しかけている。今の口語文はわりあいフレキシブルで、粘りがある。では、故人の書いたものをまるっきりの口語でたどったら、どの辺までいけるか――というような気持ちもあったんです」と述べている。「故人の書いたもの」というのは、内容としては、『明月記』のように時間をしぼることをしない点を指していると思われる。また、ここでは、内容よりもむしろ文体を指していると思われ、古文が、現在の書き手にも十分息づいているというのであり、粘着力があり、「一まとまりの長い構築を」表現できるということであろう。「故人の書いたものをまるっきりの口語でたどったら、どの辺までいけるか」という試みは、後半になるに従って明瞭に示されており、特に「愁ひなきにひとしく」の章に於ける冥界にまつわる想念や、「声まぎらはしほとゝぎす」の章に於ける平安時代の男女を連想させるような間柄として描き出されていよう。「声まぎらはしほとゝぎす」の章では、いつの時代も変わらぬ男女の実相として、背景は現代でありながら、それが平安時代であっても少しもおかしくないような荒涼とした恋愛を説話ふうに描く方向へ変化している。この章で文体が変化した背景には、古典的な言葉に、いかに現代の小説の言語が拮抗するこ

とができるかどうかに、古井の文学的な関心があったのであろう。

また、古井は、『昭和文学全集第23巻』（昭62、小学館）の「解説に代えて」の中で、「近代日本語の口語文」について、「古文の漉しや粘り、漢文の構築力や硬質の透明さ、それは無念にも失ったかもしれないが、事にひたと添い、内へ細く分け入っていく、その能力には秀でた言語のはずだ」と述べている。伝統的な日本語を、複雑な内面を描くにふさわしい言語として捉えていることが分る。古文めいた文章は、日常を描くには適さないが、内面の深いところに沈んだ想念を描く上では効果的であり、それを『仮往生伝試文』では、積極的に活用している。なお、「漢文の構築力や硬質の透明さ」もこの作品では活かされており、「七日目には身内が駆けつける、というかたちの無常迅速が、近年けっして、めずらしくはないのだとも聞いた。心臓発作でも脳卒中でもなくて。ただの『風邪』で。疫病流行の前年とは、どんな雰囲気のものなのだろう。どんな生き心地のものなのか。もちろん、疫病はいきなり始まるものではない。余剰の乏しい時代ならば、ほとんどかならず、不作凶作が先行するのだろう」（傍点引用者、「いま暫くは人間に」）というように、四字熟語が好んで用いられているところに顕著である。

三

古井は、「今の一般の人のものの考え方が、小説的というよりエッセイ的になっている」[注4]とか、「エッセイのところに、小説や評論が集まる共通の場がある」と述べている。『仮往生伝試文』は、「エッセイと小説の間を振り子のように動いて、だんだん振り子の幅が縮まって」おり、「小説になるかならないかの境目のところで、少し自由に自己表現したもの」である。情緒的に人を感動させるという、小説としてのオーソドックスな方向を、自ら断念した後に成り立った文学である。『仮往生伝試文』の中に描かれた古典の往生譚は、叙事的な性格をもちながら、文中で作者である古井自身が解説していくことで、作者の死生観ともつながる、両義的なものとなっている。古典の堆積された言語の層を引き出し、小説の言葉の背後に織り込み重層化させている。過去から連綿と続く集合的な言葉や地霊の声というものに、古井の並々ならぬ関心があることが窺える。

ただちに眼を引くのは、古井が試みてきた文体上の実験が、『仮往生伝試文』で一つの「極限」に達したということだろう。一見、反時代的で伝統回帰のようでありながら、文学を変革

しようという野心に溢れた実験的な試みである。主語をできるだけ削り、凝縮された文章が、古典の往生譚の世界と閉塞された現代の日常を、縹渺と境めなしに直結する。往生伝についての精緻な描写が息づまるように続き、混沌とした過去の物語を探索する一方で、日常についての簡潔な身辺雑記が挿入される。古文が地の文に溶け込み、時間と空間の輪郭をも融解して、微妙に人間の存在感をはかなくする。低吟する古文のリズムと事実報告の淡々とした口語文が混沌と融合し、計算された構造により、独特の無常感を漂わせた空間を作りあげている。この一見、二つの質の異なる言葉の交差と錯綜、ここに『仮往生伝試文』の文体的な特質がある。

日記の体裁や古典の解釈という方法は、旧来固定的に捉えられていたような「文学」としての制約を持たず、文学の言語的な視野を拡大し、文学にとっては、新しい言語意識の世界に触知していく有効な手がかりとなっている。この文語体の文章が、いったい何に対して不協和音を響かせ、何と共鳴しているのか。このような一見反時代的な詰屈した文体は、現代の脆弱な口語文と不調和であり、逆に、古えの時代と現代との時間の落差を消滅させ、混沌とした世界に導く働きをなしている。現代の感覚を盛りながら、響きとしてはむしろ近代を越えて、中世の日記や随筆を連想させる行文は、現代の口語散文に鋭い再検討を加える試みだと言える。また、生老病死にまつわる内容が、仏教説話などの物語・文体をふまえて展開されており、文体が主題と有機的に結びつき、作品の内容に深く寄与している。

小説を成り立たせるのは言語の織りなす意味行為であるが、『仮往生伝試文』に用いられた言語は日常の近くにありながら、日常の言語とは遠く隔たっている。つまり、日常と非日常の境界にある両義的な言語である。『仮往生伝試文』では、小説に於ける言語的多様性の導入の試みが為されており、ここに用いられた言葉は、生活の場で染みのついた日常の言語からは、かなり隔たっている。古井は、「読売文学賞の人」（「読売新聞」平2・2・2）の中で、「日本の経済・社会がここまで来るために、犠牲になったことは多いけれど、その最大のものは、たぶん、言語です。社会が言語を捨てることで身軽になり発展してきた。でも、世の中の事態が複雑になって、世間はまた言語を必要としている」と述べている。経済成長の代償に言語を犠牲にしてきたので、「息の長い言語」が必要であると古井は考えている。

日本語がかつて何度か経験した言語史上の危機は、文学言語、特に小説の言葉の先導によって切り抜けられてきたといっても過言ではない。そして情報化社会で、こまぎれの話し

言葉中心の現代では、また言語の危機を迎えているという認識が古井にはある。『仮往生伝試文』は、現代の小説の日本語が、今回も過去に成し遂げてきたような任務を果たせるであろうか、ということを問う野心的な試みでもある。日本語の伝統を踏まえた近代の言語体験の蓄積によって、現代文学の閉塞状況から脱出しようというのである。言語は、ある時代の経済的文化的システムと密接不可分に、しかもかなり複雑な関係で結びついている。『仮往生伝試文』には、既存の支配的な言語や発想の型を刷新していけるような新しい小説文体をいかに生み出せるか、という実験がある。言葉と時間を、功利的な現実社会の支配から解き放とうという意図から執筆されていると思われる。言語表現のすみずみにまで張り巡らされた書き手の「異化」の戦略としての「文体」が窺える。『仮往生伝試文』の文章は、古井個人の資質や文学観と密接に関わると同時に、現代文学の抱える難しさを改めて示す具体例とも言える。

注

1　古井は、富岡幸一郎氏との対談の中で、七章の「すゞろに笑壷に」に関連して「日常の反復を拝み、それをありがたがる。一方には、日常の反復を見て大笑いにころげる。笑いながら帰依する、そういうことはありはしないか」と述べている。「日常の反復」とは、死に向かって流れていく時間の中での愚直な日常の繰り返しと言い換えてもいいだろう。

2　富岡幸一郎『作家との一時間』（平2、日本文芸社）

3　高橋英夫氏は「現代往生の説――古井由吉『仮往生伝試文』をめぐって」（「文芸」平1・11）の中で、「日記こそ、人間が考案した最高の反覆形式であり、日記の中に封じこめられれば、何ごとにまれ、もはや往生間際なのである」と述べている。

4　「著者にきく――古井由吉『仮往生伝試文』」（平2・2・23、NHK教育）